

【飯島周先生追悼文】

チェコスロヴァキア軍団側から見たヤロスラフ・ハシェク

——飯島周さんを偲びつつ——

長興 進

本稿は2020年12月5日に、日本スラヴ学研究会主催で開かれた「飯島周先生追悼シンポジウム」の席で口頭発表した論考に、修正・加筆したものである。当日の語り口調はそのまま生かした。

(一)

本日は飯島周さんの思い出に捧げるシンポジウムの席でお話できることを、名誉なことと感じています。本日の話のタイトルは、「チェコスロヴァキア軍団側から見たヤロスラフ・ハシェク」ですが、最初に簡単に、飯島さんの思い出について触れておきたいと思います。

飯島さんとの出会いは今から45年ほど前の、1970年代中頃に遡ります。当時ぼくは、早稲田大学大学院文学研究科のロシア文学専攻に在籍していましたが、ロシア語の勉強と平行して、他のスラヴ諸語の勉強も続けていて、日本チェコスロバキア友好協会(当時)主催の講座でチェコ語も学んでいました。あるとき担当のチェコ人講師が都合で休まれたとき、代理を務められたのが飯島さんでした。おそらく40代なかばでいらっしやっただと思います。控えめで謙虚だけれども、言語学の知識がしっかりした方だ、というのが第一印象でした。

その後1980年代中頃に、日本スラヴ学研究会の前身である日本西スラヴ学研究会が立ち上げられたとき、中心になって動かれたのはチェコ語の千野栄一さんとポーランド語の吉上昭三さんでしたが、飯島さんも初期の頃から、会合にはかならず出席しておられました¹。2009年から2011年までは本研究会の会長も務められました。

飯島さんは80歳を越えられてからも、日本スラヴ学研究会の会合をはじめとして、駐日チェコ大使館やスロヴァキア大使館のレセプション、日本チェコ協会/日本スロバキア協会の催しには、かならず姿を見せておられました。ほんとうにお元気な方だなあ、といつも頼もしい思いでお姿を拝見していました。

(二)

飯島周さんのお仕事の大きな柱として、チェコ文学からの翻訳を挙げることに異論

は出ないだろうと思います。中心になったのは、いうまでもなくヨゼフ・チャペックの作品群の翻訳ですが、風刺作家ヤロスラフ・ハシェクの翻訳も手がけておられます。『ハシェクの風刺短編集』（大学書林、1989年）と『不埒な人たち ハシェク風刺短編集』（平凡社、2002年）がそれです²。ここで注目しておきたいのは、最初に対訳本（左頁にチェコ語の原文、右頁に日本語訳、下段に文法説明）をお出しになり、それから翻訳へ、という順番です。まず原文の厳密な読み込みがあって、それからこなれた翻訳へ、という流れは、言語学者としての、そして翻訳家としての飯島さんの基本的姿勢を示しているように思われます。

ぼくが飯島さんに最後にお目にかかったのは、昨年〔2019年〕11月16日の日本チェコ協会/日本スロバキア協会主催の「ビロード革命30周年記念講演会」の席でした。そのときも飯島さんは、率先して講演会の企画と、メール連絡などの組織実務を担当され、ご自身も、いつもと変わらぬお元気な様子で、「ディシデントとしてのV・ハヴェルの言葉」という講演をなさいました。講演の合間の立ち話で飯島さんは、いまハシェクのことをまとめている、とおっしゃっていたように記憶します。ぼくは、本日お話ししますように、『チェコスロヴァキア日刊新聞』にハシェク関連の記事が掲載されていることに気づいていましたので、そのことをお伝えし、飯島さんも、それは面白いですね、と強い関心を示しておられました。

しかし心残りなことに、翻訳資料をお渡しするまえに、鬼籍に入られてしまいました。もっと早くにお渡しすべきだった、と内心忸怩たる思いですが、本日は遅まきながら、飯島さんにご報告するつもりで、話を進めていきたいと思います。

（三）

まず、ハシェクについてのいくつかの事典項目をご紹介して、問題の所在を押さえておきましょう。

最初に取り上げるのは、『マサリク百科事典』、第3巻（プラハ、1927年）*Masarykův slovník naučný, III., Praha 1927*です。これは1925年から33年にかけて、プラハで出版された全7巻の当時の代表的百科事典です。項目は全文訳出しておきましたが、ご覧のように記述はごく短いものです。

ハシェク、ヤロスラフ（1883年4月24日、プラハー1923年1月2日、リプニツェ）

チェコの作家でジャーナリスト、天才的なユーモア作家で自己韜晦家。著作——『人がタトリに陥ったとき』（1912年）、『外国人ガイドブックとその他の風刺小説』（1913年）、『テンクラート氏の心労』（1912年）、『三人の男とサメ』（1922年）など。ハシェクは善良な兵士シュヴェイクの形象によって不滅の名声を獲得したが、シュヴェイクは際限のないお喋り、永遠の楽観主義者であり、確固とし

た禁欲主義者である。『世界大戦での善良な兵士シュヴェイクの運命』（1921年以降）は、人気のために演劇化され映画化されて、その人気はカレル・ヴァニェクの文学的続編を余儀なくさせた。ハシェクはルーシ〔ロシア〕の軍団で、『チェコスラヴ人』の編集部にいた。A・ドレンスキーの編集で、1923年以來ハシェク選集が出版されている。文献——Fr.〔フランチシェク〕・サウエルとイヴァン・スク『思い出に（イン・メモリアム）』（1924年）

まず、「天才的なユーモア作家で自己韜晦家」という規定に注目してください。すでに1920年代当時から、「天才的なユーモア作家」という評価が確立していたようです。「自己韜晦家」という見慣れない語は、原文は *mystifikátor* で、おそらく「自分自身を神秘化する人」、あるいはちょっと俗っぽく言えば、「他人を煙に巻く人」という意味でしょう。次に「ハシェクは善良な兵士シュヴェイクの形象によって不滅の名声を獲得したが、シュヴェイクは際限のないお喋り、永遠の樂觀主義者であり、確固とした禁欲主義者である」という性格付けがありますが、百科事典風でない「文学的表現」が面白いと思います。最後に、「ハシェクはルーシ〔ロシア〕の軍団で、『チェコスラヴ人』の編集部にいた」と述べていますが、ここでは後に、彼が軍団から離脱して、ボリシェヴィキ側に移行した事実について沈黙している点に、注意をうながしておきたいと思います。

次の項目は、1983年にモスクワで出版された『ソ連邦における内戦と軍事干渉、百科事典』Гражданская война и военная интервенция в СССР. Энциклопедия. Москва, 1983から取りました。いまさらソビエト時代の出版物を持ち出すなんて、と眉をひそめる向きもあるかもしれませんが、ある時代の歴史の証言として耳を傾けてみましょう。これも全訳です。

ガーシェク〔ハシェク〕、ヤロスラフ（1883—1923年）

チェコスロヴァキアの国際主義者、作家。教師の家庭出身。商業学校修了。1915年からオーストリア＝ハンガリー軍、ロシア軍に投降して捕虜になる。チェコ・ブルジョア層によって形成されたチェコ志願従士団に入隊（1916年）。1918年2月に左派社会民主党に組して、ロシア共産党（ボリシェヴィキ派）チェコスロヴァキア・グループを創設。1918年春に、ドイツ干涉軍に対して戦ったコミュニスト国際主義者支隊、のちにサマーラで赤軍チェコスロヴァキア人部隊の形成を主導した。1918年10月以來、〔赤軍〕第五軍。国際主義者部門を指導して、軍の政治部の国際主義部門の長だった。一連の国際主義新聞を編集して、シベリアの前線新聞と民間新聞に記事を執筆し、ウラルとシベリアの領土で元軍事捕虜

のあいだで活動を行なった。1920年からチェコスロヴァキアに戻り、ソビエト・ロシアを擁護した。小説『世界大戦期の勇敢な兵士シュヴェイクの冒険』（1921-23年）の作者。

この事典では、「チェコスロヴァキアの国際主義者」という規定が冒頭に来ています。この「国際主義者」интернационалист という、いまでは古めかしい響きのある用語は、「ソ連以外の国で生まれたが、ソ連のイデオロギーや国益に奉仕した人」ほどの意味だと思っておいてください。そのあと「チェコ・ブルジョア層によって形成されたチェコ志願従士団に入隊」からはじまって、「1918年春に…… коммуニスト国際主義者支隊、のちにサマーラで赤軍チェコスロヴァキア人部隊の形成を主導した」以下、もっぱらハシェクがボリシェヴィキ派に移行してからの経歴が列挙されて、最後に付け足しのように、「『世界大戦期の勇敢な兵士シュヴェイクの冒険』（1921-23年）の作者」が添えられています。「ソビエト・ロシアを擁護した」という思わせぶりの決まり文句が、具体的になにを意味しているのかも気になるところです。

最後に『集英社 世界文学事典』（2002年）の「ハシェク」の項目を見てみましょう。この項目は飯島さんがお書きになっています。本日の話に関係する個所だけ抜粋しました。全体の三分の一ほどです。

ハシェク ヤロスラフ Jaroslav Hašek 1883. 4. 30-1923. 1. 3

〔省略〕 やがて第一次世界大戦が勃発、ハシェクの運命は急転回する。〔19〕15年にはオーストリア軍に徴兵され、ロシアと戦うために東部戦線に配置されたが脱走してロシア軍に投降、有名なチェコスロヴァキア軍団に参加。ロシア革命が起こったのちは、軍団と敵対する赤軍に転じ、国際的宣伝活動に活躍、第5軍団の共産党政治委員にまでなり、酒も断ち精励恪勤した。しかし止むことない風刺のため、周辺に敵も多くなり、ついに本国での革命に参加するという名目で、ロシア人妻のシュエラを連れひそかに帰国。だがチェコではすでに T. G. マサリクによる民主政治が確立され、共産主義革命の余地はなく、ハシェクは反逆と重婚の罪で告発され、失意のあまり、また無頼の生活に戻った。そのどん底で書き始めた『世界大戦中のよき兵士シュヴェイクの運命』（1921-23、通称『兵士シュヴェイクの冒険』）が当たりし、作者の名を不朽にした。この作品の執筆中、ハシェクはプラハを離れて東チェコの寒村リプニツェに住みついたが、不摂生の故か健康を害し、大作も未完のまま、不時の死を迎えた。〔省略〕

以上の三つの百科事典項目の記述を比較してみるだけでも、ハシェクが「謎めいた」、

きわめて「コントラヴァーシャルな」人物であることが、お分かりいただけるかと思
います。

(四)

さてここで、『チェコスロヴァキア日刊新聞』のほうに話の重心を移しましょう。

【図】は、以下で触れるエッセイ「談話室：『パイオニア』たち」が掲載された号の
タイトル部分です。最上段のデータは「44号、ペンザ、土曜日、1918年4月6日、
価格20コペイカ」。次に新聞名のČeskoslovenský denníkですが、「チェコスロヴァキ
アの」という名称は、今日の我々にとってはごく一般的なものに響きますが、この新
聞が創刊された1918年当時は、「新鮮な響きを持った新造語、将来に向けたパースペ
クティブを示す概念」であったことを、強調しておきたいと思います。その下に対応
するロシア語のサブタイトルが添えられています（旧字体のiが使われています）。
その下の、上下の横線で囲われた部分には、「チェコスロヴァキア国民会議と在ルーシ・
チェコスロヴァキア諸団体連合事務局機関紙」とあります。

『日刊新聞』は1917年12月から1920年7月まで、旧帝政ロシア各地（キエフ→ペ
ンザ→オムスク→チェリヤビンスク→オムスク→エカチェリンブルク→イルクーツク
→満洲里→ハイラル→ハルビン→ウラジヴォストーク）で刊行されたチェコスロヴァ
キア軍団の機関紙です。軍団の機関紙と言っても、軍事司令部に対して相対的に独立



【図】

した編集部（おもに一群のチェコ人知識人の集団）の手で編集・刊行されました。通し番号によると、全部で717号出ています。使用言語は大部分がチェコ語で、ときおりスロヴァキア語も用いられ、とくに初期にはロシア語の記事も散見されます。読者として想定されていたのは、ロシア・シベリア・極東地域に駐留していた軍団兵士（チェコ人とスロヴァキア人）にほぼ限定されます。ロシアの軍団兵士は最大に見積もっておよそ6-7万人、『日刊新聞』の発行部数は、最盛時で一号につき約7000-8000部でした。

この新聞は1918-20年のロシア内戦、チェコスロヴァキア軍団の武装出動、日本のシベリア出兵などに関する同時代の出来事についての貴重な証言を、豊富に提供していますが³、本論で取り上げるハシエク関係の記事は、チェコ人 коммуニスト集団に対する論争的な文脈のなかで登場します。

ハシエクに触れた記事としては、さしあたり次の12編が確認されています（カッコ内のデータは、掲載年月日、通し番号、発行地）。――

1. 破壊活動 Podkopná práce (1918年4月5日、43号、ペンザ)
2. 談話室：『パイオニア』たち Beseda: „Průkopníci.” (1918年4月6日、44号、ペンザ)
3. 「将校のシヴィホフスキー」とその一味 „Oficír Švihovský” a jeho komanda (1918年4月8日、45号、ペンザ)
4. サマーラでの集会（私信から） Schůze v Samaře. (Ze soukromého dopisu.) (1918年4月18日、54号、ペンザ)⁴
5. マスコミの声 Hlasy tisku (1918年4月18日、54号、ペンザ)⁵
6. ロシア革命の展開に寄せて K vývoji ruské revoluce (1918年4月25日、59号、ズラトウースト)⁶
7. 公報：チェコスロヴァキア軍野戦法廷 Úřední věstník: Polní soud Československého vojska (1918年7月27日、135号、オムスク)
8. 昔の文書から Ze starých dokumentů (1918年7月31日、138号、オムスク)⁷
9. 「我々」、我々について語る „Naši” o nás (1918年8月8日、145号、オムスク)⁸
10. 封印列車 Zaplombované vagony (1918年11月5日、221号、エカチェリンブルク)⁹
11. 諸々 Všelicos (1918年11月5日、221号、エカチェリンブルク)¹⁰
12. マジャール人とチェコ人 коммуニストたちの運命 Osud maďarských a českých komunistů (1919年2月9日、34号(301号)、エカチェリンブルク)¹¹

さしあたり注目していただきたいのは、大部分の記事が1918年の号に掲載され、とくに半数が同年4月に集中していることです。この事情は、伝記作家グスタフ・ヤノーホが『ハシェクの生涯——「善良な兵士シュベイク」の父』のなかで書いているように、「彼〔ハシェク〕は1918年4月になって初めてチェコ民族会議〔チェコスロヴァキア国民会議〕ロシア支部に手紙を出し、すでに実行された戦線転向を通告した」¹² ことに関係しているのかもしれませんが。

(五)

それではいくつかの記事の内容を見てみましょう。1.の「破壊活動」（筆者はおそらく、2.の「談話室：『パイオニア』たち」と同じルドルフ・メデク）は、ポレミックな性格を持った長文の記事で、1918年4月5日にペンザで刊行された号に掲載されました。まず発表された時期に注目してください。1918年3月3日のドイツとソビエト・ロシアのあいだのブレスト＝リトフスク講和条約締結の後ですが、しかし同年5月末の軍団の武装出動（ふつうは「反乱」あるいは「蜂起」などと呼ばれますが、ぼくは原語の *vystoupení* に従って、こう訳しています）以前の時期で、軍団とソビエト政府の関係は緊張を含みつつも、敵対関係にあったわけではなく、3月26日には両者のあいだで、いわゆるペンザ協定が結ばれて、ソビエト政府は、武器の引き渡しを条件として、軍団のウラジヴォストークへの移動支援を約束しています（軍団はウラジヴォストークに到着したあと、船でヨーロッパに移動し、フランスの西部戦線で、ドイツおよびオーストリア＝ハンガリーとの戦闘を継続する予定でした）。とはいえこの時期に、軍団からボリシェヴィキ側に移行した一群のチェコ人 коммуニスト・グループ（ハシェクもそれに含まれます）は、『パイオニア』 *Průkopník* という機関紙を発行して、軍団兵士たちにボリシェヴィキ側への移行を呼びかける宣伝工作（軍団側に言わせれば「破壊活動」）を開始しています。

「破壊活動」の一部を読んでみましょう。

……それ〔チェコスロヴァキア国民会議指導部への攻撃〕に加わったのが、『革命』紙と『チェコスラヴ人』紙の元編集者である二人の善良な助手——ヤロスラフ・ハシェクとB・フラである。ハシェクは、以前に自分が温もっていた古巣を侮辱する、というくせを持っている。こうしてまだ〔チェコ〕国内で、『チェコの言葉』紙〔国民社会党の機関紙〕と決別したとき、すぐさま『人民の権利』紙〔社会民主党の機関紙〕に、国民社会党の舞台裏からのセンセーショナルな内輪話を書きはじめた。それを当地でもやった。いまではわが軍〔チェコスロヴァキア軍団〕から逃亡して、わが軍とそれに関係するすべてを貶めている。ボリシェヴィキ派の台所を間近に覗いたら、彼らについていかに書くことになるかも、我々

は想像できる。ポリシェヴィキ派について、もうひとつのハシエク物を書くこと
だろう！

2. の「談話室：『パイオニア』たち」は、全編がハシエクを対象（というか標的）
にした長文の論争的エッセイで、筆者は軍団の指導的幹部の一人ルドルフ・メデクで
す。彼は коммуニストの機関紙『パイオニア』を論評しつつ、こう書いています。

……その先でのちょっとした驚きは、ヤロスラフ・ハシエクという不滅の名前
と、最後にそれに劣らぬ驚きはB・フラだ。ぼく〔メデク〕は心のなかでヤロス
ラフ・ハシエクの、いつもおずおずとした顔の表情と、臆病そうなアルコール中
毒気味の目つきを思い浮かべる。その目にはときおり、優れたユーモア作家の、
ある種の非凡な才能の火花がきらめくが、別のときには君たちの前で、羞恥心と
定期市風の厚顔さの意識的感覚とともに、ためらいがちに伏せられる。ぼくには
分かっている。——ヤロスラフ・ハシエクはしばらく経つとこれらすべてを、す
でにプラハ時代と、かつての〔キエフのチェコスロヴァキア諸団体〕連合におけ
る彼の「勇敢な」活動から分かっているように、口元に罪のない微笑みを浮かべ
て、腕白小僧の無節操な無関心を持って撤回するのだ。彼が『パイオニア』紙に
寄稿していることは、この新聞になにか独特な性格を付与している。『動物世界』、
『チェコの言葉』紙、『人民の権利』紙の元編集者の善良な兵士シュヴェイクは、
真面目さを装っているけれど、ユーモア文学の癖はそんなに簡単に直るものでは
ない。

真面目さを装おうとすると、それだけ疑わしく、それだけいっそう笑いを引き
起こす！ ……

ぼくには君が気の毒だ、ヤロスラフ・ハシエクよ、だって白状しなければなら
ないが、ぼくは十把一絡げに君を非難した人々には組みしなかったし、何度か君
に、冒険的な誇大妄想の挑発と、軽率で無責任な気まぐれに対して警告した。ぼ
くにはチェコ人作家の名前が惜しくて、おそらく恥に対するある種の階層的危惧
を持っていたのだ。しかし今日目にしているのは、これが君の運命であること、
君の無定型な心と無節操で無関心な人間性の、悲しむべき運命であることだ。君
の道化の小太鼓は、この戦争〔第一次世界大戦〕についての憂鬱な事柄を見つけ
たが、それは、我々の運動を損ない、内と外から笑いものにする、君のきわめて
忌まわしいユーモア話だ。君がこの文章を読んだら、羞恥心の最後の一片のため
に、赤面するのは分かっているが、なぜなら君は、年老いた売春婦上がりと同じ
ようにセンチメンタルで、ぼくが君に何度も、偽りと卑劣さに対して警告したこ
とを知っているからだ。——でも君は悔い改めないだろう。もったもきつと撤回

して、一時的には悔悟するだろうが、しかしその後も、笑いものにするという、自分の職業的な仕事を続けることだろう。ぼくたちを、ぼくたちの軍隊を、チェコの作家層を、自分の民族を笑いものにして、じきに自分の新たな「ユーモア的共産主義者」も笑いものにするようになるだろう。ぼくは「予言者のまなざしで」君の一派を見ている。……

こうしたいっさいは、だれかれが国民会議のメンバーになれなかったからか、素朴さと無能力、あるいは悪意のために、仕事から排除されたからにすぎない。彼らのポケットには、レーニン、トロツキー、マルクスから抜粋した安物のパンフレットの束、頭のなかは、『チェコスラヴ人』紙の最近の論説を支配していたような、完全な思想上の混乱か、あるいは文学的・哲学的堅苦しきだ。ぼくは、政治的に成熟したわが軍兵士が、こんなものにひっかかって、この仮面舞踏会を信用するとは信じていない。……

引用した部分のトーンからお分りのように、これはレトリックを駆使して論敵を「論破し」、「笑いものにする」ことを目的とした、「党派闘争的」性格を持った文章です。言うまでもありませんが、この文章だけで、「そのとおりだ、勝負あった」と判断するわけにはいきません。反対側の「言い分」にも耳を傾ける必要があるからです。ここでさしあたり確認しておきたいのは、1918年4月段階で、ハシェクの名前が軍団関係者のあいだで広く知られていたこと、その彼が「共産主義者」の側に移行して、軍団に対抗する言説を展開したことに対する「失望」と「裏切られたという気持ち」が滲み出ていること、その後はいわゆる「個人攻撃」の部類の言説が続くことです。メデクとハシェクはたがいに面識があったようで、それだけいっそう「こっけいな痛ましさ」というか、「痛ましいこっけいさ」が感じられます。

(六)

このあと1918年5月末にチェコスロヴァキア軍団は、ウラル地方のチェリャビンスクでの兵士集会によって、ソビエト政府と対決することになっても、ウラジヴォストークへの道のりを自力で切り開くという、「武装出動」路線を決定して、じきにソビエト政府と交戦状態に入ります。したがってチェコ人共産主義者集団とも明確な敵対関係になり、事態は冗談事ではすまされない深刻な様相を呈することになります。それを象徴するのが、1918年7月27日の号に掲載された「7. 公報：チェコスロヴァキア軍野戦法廷」でしょう。これはハシェクに対する軍団側からの逮捕令状です。

オムスク、1918年7月25日、203号、逮捕令状

チェコスロヴァキア軍野戦法廷は原告の申し立てによって、ヤロスラフ・ハシェ

クに対する逮捕令状を出す。ハシェクはプラハの『ユーモア新聞』の元編集者、ヤン・フス第一チェコスロヴァキア連隊の元志願兵、キエフの『チェコスラヴ人』の編集者、モスクワの社会民主コミュニスト党の新聞『松明』の編集者、サマーラにおけるチェコスロヴァキア赤軍の組織者で、チェコスロヴァキア民族に対する度重なる祖国反逆罪の咎で告訴された。

チェコスロヴァキア革命運動の全メンバーは、いつどこであれヤロスラフ・ハシェクを逮捕して、厳重な監視のもとにチェコスロヴァキア軍野戦法廷に連行するように、厳命される（チェコスロヴァキア国民会議支部付属の拠点）。

野戦法廷首席裁判官アイゼンベルゲル、審問官ヘス

読んでいるだけでも怖くなるような「峻厳な」トーンの記事です。

さてこの後、軍団の方はウラル戦線でポリシェヴィキ派との戦闘を続け、1918年10月末には本国でのチェコスロヴァキア国家成立によって、「戦闘目的」は達成されますが、連合国との関係と本国政府の思惑で、シベリア現地に留まることを余儀なくされます。1918年11月にクーデターによって成立したコルチャーク提督の率いるオムスク政府との関係も緊張含みで、軍団は1919年1月に前線から撤退して、後方のシベリア幹線鉄道沿いの警備任務にまわります。その間に連合国との交渉の結果、段階的に祖国への帰還輸送が開始されます。1919年末にはコルチャーク体制の急激な崩壊によって、東方への撤収を余儀なくされますが、結果的には1920年9月までに、全部でおよそ36の輸送団を組んで、ウラジヴォストークから出港し、多くは東シナ海、インド洋、スエズ運河を経由して、一部は北米大陸を横断して、同年末までに軍団の大部分は無事に帰国して、「凱旋者」として熱烈に歓迎されます。チェコスロヴァキア政府は帰国する軍団兵士のために、国家機関での一定のポストを確保するなど、優遇策を取っています。

いっぽうハシェクの方は、1918年10月にソビエト第五軍に正式に参加して、赤軍の組織活動や、国際主義者のあいだでの情報宣伝活動に携わり、1919年末にはじまる赤軍第五軍の東方進出の際には（軍団はこのために東方撤退を余儀なくされるのですが）、軍隊とともにイルクーツクまで進出します。そして1920年11月に「モスクワにあるチェコ・スロヴァキア共産党宣伝本部の要請により、本国での共産党の革命運動強化のため」（『不埒な人たち ハシェク短編集』、358頁）、エストニア経由でロシアを出国して、同年12月にはプラハに姿を現します。

つい先ごろまでロシア内戦の戦場で、敵対する陣営に属していた両者が、それも相手のことをよく知っていた両者が、結局同じ時期に、祖国（チェコスロヴァキア共和国）に戻ったこととなります。

(七)

ぼくは今回、ハシェクが帰国してから発表した、ロシア滞在期に取材した作品群を、新たな視点で読んでみました。『兵士シュヴェイクの冒険』第四巻(岩波文庫、1974年)に収められた「捕虜になった兵士シュヴェイク」と、「付録」中の「サラートへの手紙」、「ヤルミラとリーシャへの手紙」、「記念日の回想」、「靴の埃を打ち払い」が、『不埒な人々』に収録されたものでは、「わたしの死亡記事の書き手とわたしはどのようにして逢ったか」と「神さまについての話」などです。とくに「靴の埃を打ち払い」は、エストニア経由でロシアを出国した顛末を、ユーモアたっぷりに描いています。ハシェクは意気軒昂であるように見え、ユーモアと風刺の筆の冴えもあいかわらずです。しかもこれを、帰国そうそうに国内で実名で発表しているのですから、懲りていない、というか、あつけらん、というか、凶太い確信犯なのか。彼がチェコスロヴァキアに入国した際に、軍団が出した逮捕令状は適用されなかったのでしょうか(誤解がないように付け加えておきますと、ぼくは逮捕令状が適用されるべきだった、などと言いたい訳ではありません)¹³。

戸惑うことばかりですが、飯島さんに『日刊新聞』のこれらの記事をお見せして、逮捕令状のことなどもお聞きしていたら、どのような返事が返ってきたでしょうか。その内容はいまでは想像するほかないのですが、手がかりになるようなことを書き残していらっしやいます。

たとえば『不埒な人々』の「訳者解説」には、次のような文章があります。——「[ハシェクは] ロシア二月革命後は、左翼的傾向を一層強め、ロシア革命軍(すなわち赤軍)と対立する軍団の主流派に反抗し、モスクワに移ってロシア共産党に参加する。サマラでの事件後は、チェコ本国に対する反逆罪の宣告を受けた。……ロシア革命の混乱期に、赤軍と交戦しながらロシアを西から東へ文字通り横断して行った軍団の動きは、ソヴィエト連邦政府にとってあまりにも大きな障害であり、同時に、祖国に忠誠を尽くす軍団を裏切ったハシェクの行為は、まさに大逆罪に値した」(259頁)

ごらんのように飯島さんは、ハシェクの側にびったりと寄り添って、彼の行動を賞賛したり、あるいは弁明したりするような立場は取っておられません。かといっておそらく軍団側からの「ハシェク批判」を、そのまま受け入れることもなさらなかったのではないかと。「そうですか。こんな見方もあるんですね。ハシェクは複雑な人でしたからねえ……」と、ちょっと困ったような表情で、額を拭われる飯島さんのお姿が目につくような気がします。

ぼくは今回のシンポジウムの予告のチラシに、「政治的正当性と文学の力」の狭間、などと勇ましいことを書いてしまいましたが、こんなことをむきになって話し出すと、『不埒な人々』に収録された「読書家の仲間になって」という短編で、ハシェクにおちよくられているペダンチックな「読書家の仲間」になってしまいそうで、氣勢を

削がれます。

ハシエクの『兵士シュヴェイクの冒険』はおそらく今後も、ユーモアと風刺小説の傑作として読み継がれていくでしょう。いっぽう 1989 年以降のチェコとスロヴァキアの歴史学では、シベリアでの軍団の活動を、チェコスロヴァキア建国に直接につながる「歴史の主流」とする記述を進めていくでしょう。両者を無理に交わせることはないのかもしれない、をさしあたっての話の結論とすることにしたなら、飯島さんはなんとおっしゃられるでしょうか……。

最後にいまいちど、飯島さんの安らかなご冥福をお祈りして、このつたない報告を終わりたいと思います。ご清聴、どうもありがとうございました。

【追記】

12月5日のシンポジウム終了直後に、『不埒な人たち ハシエク短編集』（平凡社ライブラリー、2020年）が刊行されたので、さっそく手に取った。2002年の同名の翻訳の増補改題版で、旧版に収録されていなかった「古い薬種店の話」と「ブグリマ市の司令官」の二編が追加されている。

とくにロシア内戦での体験に題材したと思われる後者は、ひじょうに注目すべき作品である。赤軍の側に立ってロシア内戦に参加したハシエクが、「権力」を行使する側に立たされたときの「微妙な」立ち位置が、「自己韜晦」した筆致で、巧みに描き出されている。

飯島さんは、この本に収録された「平凡社ライブラリー版 編訳者あとがき」（「2020年3月」の日付が打たれている）¹⁴で、この作品には「全体的にある種の緊張感が漂い」、「戦局の不安定、上層部からの無理な命令、軍内部でのいざこざなど、命をかけた革命の厳しさを体感したハシエクにとって、新しい心境が与えられたのかもしれない」（375頁）と書かれている。

本来「笑える」性格のものではない「血なまぐさい」話題を、一片の「ユーモア」短編に仕立て上げる腕には、やはり舌を巻かせられるが、この作品でのハシエクの「自画像」は、おそらく「こうあるべきだった」、「こうだったらよかった」という思いで、修正・潤色されているのではないか。

「編訳者あとがき」には、「『ブグリマ市の司令官』は1921年1月から2月にかけて『トリブナ』誌に発表された」（373頁）とある。とするとこの作品は、ハシエクの帰国直後に、チェコ国内で実名で発表されたことになる。同じくシベリアから帰国したばかりの軍団兵士たちが、この作品を読んだら、いったいどんな反応を示しただろうか。「祖国反逆者」を野放しにして、あまつさえ作品の発表を許すとは、いかななものか、と息巻いたのか、それとも赤軍のなかでも「ヒューマンな」姿勢を保っているように見え、「恐るべき現実」をユーモアと風刺で描き出すハシエクの筆力に圧倒さ

れて、黙り込んだのか……。

ちなみに飯島さんはこの「編訳者あとがき」に、ひじょうに気になることを書いておられる。ハシエクがロシア滞在中に、ボリシェヴィキ派の出版物に発表したという「日本からのぼやき」という記事のことである¹⁵。ハシエクが言及している英字紙『Japan Advertor』は、まちがいでなく『The Japan Advertiser』のことで、『日刊新聞』は日本関係の情報源として、この新聞からしばしば引用している。ちなみに同紙は「ミカドの宮廷から発刊されている」のではなく、この時期東京で、アメリカ人経営者B・W・フライシャーが出版していたクオリティ・ペーパーだった。『ニシ・ニチ』はおそらく『ニチ・ニチ』のことで『東京日日新聞』をさし、「オータニ・キクゾウ」は言うまでもなく、日本の浦塩派遣軍司令官で、一時は全連合軍の総司令官も務めた大谷喜久蔵のことだろう。

つまりハシエクの「日本のぼやき」という一文からは、『日刊新聞』に掲載された記事を参考にして書き上げたのではないかと、という印象を強く受けるのである。ところが訝しいことに、さしあたり『日刊新聞』で、これらの記述に対応するような記事は見つかっていない。

もう一点。本文中で飯島さんが、「オオカミに餌をやらなければ、絶えず森の中をねらうものだ」(349, 354頁)と訳されているロシアの諺は、Как волка ни корми, он всё в лес смотрит (オオカミはどんなに飼いならそうとしても、どうしても森のほうを見るものだ=人の本性は変わらないものだ)で、つまり「アガポフ同志」はチェコ人であるハシエクに対して、「革命」の側に立っているように見えても、しょせん「反革命」の軍団の同類ではないのか、と脅しをかけているのではないだろうか。

こんなことを飯島さんにお伝えしていたら、きっとほほえみながら、「ほう、そうですか、出典がわかると面白いですね」とか、「ああ、そうでしたか。わかりました。改版のときに直しておきましょう」とか、おっしゃってくださったと思う。まことに心残りなことに、その機会は失われてしまった。改めて飯島さんのご霊前に合掌する。

(2021年1月10日：追記)

注

- 1 「日本西スラヴ学研究会の歩み——創設から『西スラヴ学論集』第10号まで」『西スラヴ学論集』(2007年、第10号)に、1984年2月の第一回会合の後で、飯島周氏に参加を呼びかけた、という記述がある(163頁)。
- 2 本シンポジウム終了直後の2020年12月10日に、増補改題版『不埒な人たち ハシエク短編集』が、平凡社ライブラリーの一冊として出版された。この新版については、本論末

- の「追記」で触れる。
- 3 拙論『チェコスロヴァキア日刊新聞』は日本のシベリア出兵をどのように見ていたか、『ロシア史研究』（104号、2020年4月、167-180頁）を参照。
 - 4 サマーラでの集会（私信から）——1918年4月12日にサマーラのチェコ人 коммуニストが主催した集会に参加した人物〔フェイゲルレ〕の批判的な印象記。——「それ〔集会〕を招集したのは、当地に到着した『パイオニア』紙の編集者ヤロスラフ・ハシェクだ。個人的にとってもよく知っていて、しばしば話したこともあるこの коммуニストの報告者〔ハシェク〕が、ぼくには気の毒だった。ぼくは彼が喋っている様子を観察した。正しくふるまっていないことを、完全に自覚した人間のような印象を受けた」
 - 5 マスコミの声——「サマーラの今月〔4月〕14日のソビエトの新聞に、Jar.〔ヤロスラフ〕・ハシェクの「チェコスロヴァキア人の兄弟たちへ」の呼びかけが掲載された。ハシェクはいささか混乱して、カチーリンを反革命派扱いして（彼はボリシェヴィキだった）、ゲルマンのハンニバルは共和国の門のそばにいる、と言っているが、それはもう盛り土のところにいる（ペトログラードから150露里）。しかしこの呼びかけのなかには理性的な文章もある。——「我々は知っているが、諸君たちのなかの何人かは、「フランスに行くことを望まない」というスローガンのもとで、自分のことだけに気を配り、そもそも軍事的・革命的勤務を避けようとしている。これは許されないことだ！」
 - 6 ロシア革命の展開に寄せて——ロシア革命、とくに労働運動の状況を、批判的に分析した論説。筆者はフランチシェク・リフテルと思われる。「……自分たちを労働運動の唯一の誤らない解説者と見なしている、ハシェクのユーモア＝ коммуニスト協会のみならず、なおロシアの地でロシアの労働者層に、社会変革も発展の鉄の法則に従わなければならない、あらゆる性急さと無思慮に対しては、労働者層自身が高い代価を支払うことになる、納得させることになるだろう」
 - 7 昔の文書から——「サマーラの前「 коммуニスト」である有名なヤロスラフ・ハシェクは、その昔チェコスロヴァキア軍に対して純粋にハシェク風の呼びかけを出した。そのなかでとくにこう述べている。——「我々は、祖国のすべてのチェコ人の考え方を熟知していて、彼らは全世界革命勝利のための闘争に赴く準備がある。それゆえ我々は宣言するが、チェコスロヴァキア国民会議の冒険に参加するすべてのチェコスロヴァキア人は、全世界革命の裏切り者であり、チェコ民族は、彼らが自由なチェコに帰国することを決して許さないだろう」
 - 8 「我々」、我々について語る——チェコ人 коммуニストのヨゼフ・ポスピーシルが、1918年7月21日付けのペルミの『イズヴェスチヤ』紙に掲載した記事についての論評中での言及。——「ポスピーシルは我々が武装出動した初期に、我々に反対するハシェクの下劣な声明に署名した」
 - 9 封印列車——1918年11月の、本国での独立したチェコスロヴァキア国家成立直後の、軍団に対するソビエト政府の「切り崩し工作」に対する反論。ちなみに「封印列車」とは、1917年春の前例を念頭において、非武装の軍団兵をソビエト領内を通して帰国させる、というソビエト政府の提案を、皮肉を込めて表現している。この論説の筆者は、『日刊新聞』

の「論客」の一人だったヨゼフ・クデラ。——「ロシア・ソビエト政府の扇動事務所は、大規模な活動を展開している。そこでは大勢のチェコ人共産主義者も働いていて、彼らは生活上の危惧から、自分の脳髓と手を極端に緊張させて、わが民族とわが軍の解体に寄与し、そうすることで、祖国反逆罪に対する相応の処罰を逃れている。一部の情報が証言しているところでは、モスクワのポリシェヴィキ無線電信の編集と作成には、ヤロスラフ・ハシェクが大いに加担している」

- 10 諸々——「「善良な兵士シュヴェイク」〔ヤロスラフ・ハシェクを暗示〕は、いまモスクワのポリシェヴィキ情報事務所に陣取って、額に汗して無線電報を継ぎはぎしているが、我々〔チェコスロヴァキア軍団〕が最初にそれを傍受することを承知している。ハシェクの処方箋は周知のところだ。——一つか二つの朗報を取り上げて、そのなかにかくつかの、でっち上げたか、傾向的に色付けされた情報を放り込んで、そこから、わが隊列内にパニックを引き起こす目的を持った、本当のたわごとができあがる。それゆえ兄弟たちよ、モスクワからの無線電報には注意してくれ！」
- 11 マジャール人とチェコ人共産主義者たちの運命——「チェコ人共産主義者たちもウファ戦線から戻ってきて、彼らのなかには悪名高いヤロスラフ・ハシェクもいるが、彼はウファの新聞で、チェコスロヴァキアの名前の面汚しを続けていた」
- 12 G・ヤノーホ『ハシェクの生涯——「善良な兵士シュベイク」の父』（みすず書房、1970年、147頁）
- 13 講演後の質疑応答のなかで林忠行氏（京都女子大学）から、「この逮捕令状は、シベリアの軍団内部でしか効力を持たなかったのではないか」という指摘をいただいた。そうかもしれない。この点の解明は今後の課題としたい。
- 14 ぼくは本論の（二）で、「飯島さんは、いまハシェクのことをまとめている、とおっしゃっていた」と書いたが、ひょっとしたらこの「編訳者あとがき」のことだったのかもしれない。
- 15 ブルナ・ルカーシュ氏（実践女子大学准教授）に、この翻訳の原文 *Nárek z Japonska* を提供していただいた。記して感謝する。